

## 第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

我が家の本棚

山口県 周南市立秋月中学校 三学年

渡邊 真央

私の家の本棚は一般的な家のものとは一味違う。なぜなら、ある物がある本棚の下段にぎっしりつまっているからだ。そのある物とは、我が家の保険や年金に関する資料だ。私の母は保険のことを知ること、学ぶこと、調べることに熱心だ。その行動は素晴らしいのだろうが、私はそんな母の姿を見て、少し呆れていた。「何してるの。」「ちよつと保険のことについて調べてるの。」「どこ行くの。」「保険のこと相談しに行ってくる。」「保険保険って、保険なんてどうでもいいじゃん。」「保険とは何なのかさえも分かっていなかった私にとって、また反抗期だったこともあつてか、その頃の母の姿は私にとって苛立たしかった。

どこへ行く途中だったかは忘れたが、母と私二人きりの車の中で、沈黙を打開するための話題提供として保険とは何なのか聞いてみたことがあった。母は保険について基本的なことを一通り教えてくれた。その後、母は独り言のように、こうつぶやいた。

「保険って私達の人生の相棒みたいなもんなんだよね。」

保険に加入すべきか否か。誰もが通る分岐点。保険に加入するということは、見えない未来を保障するためにお金を払うことになる。そのことに對して不満を感じる人は多いと思う。これは、保険に加入するか迷っている人に限ったことではない。今、保険に加入している人達の中にも不満がある人はいるだろう。しかしそれとは對照的に、私は車の中で母から保障のことを聞いたとき、保険は私達にとって救世主のような存在だと思った。私や家族が「もしも」の状態になったとき、路頭に迷うことなく生活できるように、安心をもたらしてくれる「お助けマン」、それが保険なのだ。それが分かったとき、やつと保険の重要さに気がついた。

「保険って私達の人生の相棒みたいなもんなんだよね。」という母の言葉。今なら理解できる。自分の未来を考えると、期待や希望がある反面、不安もある。その不安はなかなか消し去れない。それでも、保険は未来への不安という重たい荷物を一緒にかつぎ、安心させてくれる。人と人とが支え合って生きているのと同様に、人と

## 第55回中学生作文コンクール

保険も支え合うことができるはずだ。そういう温かい関係になるべきだと思う。そのためにも、一人ひとりが保険について正しく知り、ちゃんと向き合わなければならない。そうすれば、人と保険が支え合えるだけでなく、保険を通じた人と人との絆も実現することができるのではないだろうか。

私の母が保険について熱心に考えてくれる人でよかった。母がそうでなかったら、私は保険の重要さに気づけなかっただろう。保険は私の人生を守ってくれる。その保険に私を加入させたのは母だ。母は私の人生を守ろうとしてくれていた。今現在、生命保険に加入している人は多く、保険に入るのは当たり前になってきている。だが、何かに自分の人生を守ってもらうことは普通ではない。それを実現しているのが保険だ。そう考えると、保険の存在のありがたさがよく分かる。また、私は今、別の面でも保険の存在のありがたさを感じている。車の中での会話以来、母と保険の話をするが増えた。それに伴い、世間話を頻繁にするようになっていた。私が反抗期に入り、離れていた母と私の距離を「保険」という存在が縮めてくれた。今の私にとって、保険は特別な存在なのだ。

何故あの頃は保険というものに悪い印象をもっていたのだろうか。おそらく「食わず嫌い」ならぬ「知らず嫌い」だったのだろう、あの頃は呆れていた本棚の下段も今となっては我が家の長所と思えるようになった。私も今度、あの本棚の資料を見てみよう。